

【 12 】

|         |                                                  |
|---------|--------------------------------------------------|
| 氏 名     | 栗 田 修<br>くり た おさむ                                |
| 学位の種類   | 教 育 学 博 士                                        |
| 学位記番号   | 論 教 博 第 15 号                                     |
| 学位授与の日付 | 昭 和 47 年 5 月 23 日                                |
| 学位授与の要件 | 学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当                          |
| 学位論文題目  | デューイ教育学の起源<br>—彼の生長としての教育観はいかなる過程をへて成立したか—       |
| 論文調査委員  | (主 査)<br>教 授 鯨 坂 二 夫    教 授 篠 原 陽 二    教 授 池 田 進 |

論 文 内 容 の 要 旨

本論文はデューイ教育学の骨子である「生長としての教育」の成立過程を歴史的に探究したものであり、五章からなっている。執筆者は第一章においては、デューイの哲学的覚醒について論じ、デューイが進化論者ハックスリの「生理学初歩」によって目覚まされ、ダーウインの「種の起源」による影響を強くうけたことを論証している。

第二章においては、哲学的に覚醒したデューイが、その課題解決の論理をカントの批判哲学によって基礎づけたことをとりあげ、カントの認識論や心理学に傾倒したデューイの思想的遍歴のあとを明らかにしようとしている。

第三章においては、最高善としての自我実現を論じ、デューイのカントからヘーゲルへの移行を解明しようとしている。すなわち、カント的理性のヘーゲル的展開の過程を、デューイが「経験」として把握し、さらにその立場とグリーンの「自我実現」とを調和しようとした点について検討している。

第四章においては、デューイによるグリーンの「自我実現」の批判について論じ、グリーンが教訓的倫理学であり、倫理学における準備説であるとしてデューイはこれを斥け、自己の立場を「現実としての経験」においたことについて論述している。

第五章においては、デューイの「生長としての教育」の成立をその実験主義的論理学の背景において論じている。すなわち、教育の基盤は子どもが直面する現実生活、経験の再構成にあることを主張するに至る過程を詳らかに解明している。

その間、デューイ研究者の諸説を紹介し、執筆者自身の立場において、それについての批判を加えている。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

執筆者は本論文において、デューイ教育学の基盤である生長としての教育の成立過程を解明しようとし

ている。主論は第一章から第五章におよび、デューイの思想遍歴の背景について比較史的な検討が試みられ、デューイの一貫した討究の志向について執筆者独自の分析がなされている。

その理解把握は適切であり、論述も正鵠を得ている。

すでに、デューイ初期の教育思想の展開については各種の論考がなされているが、本論文は其中にあって、デューイがたえず一貫した志向を堅持し、ダーウイン、カント、ヘーゲルを媒介として独自の生長としての教育観を成立せしめた過程を、比較史的な立場から考察したものとして特徴づけられる。

本論文については、カントの思想の理解に関し、なお今後一層の精進が望まれるが、全体として問題把握とその解明の方法に独自性が認められる。

よって、本論文は教育学博士の学位論文として価値あるものと認める。